



Title	中国語量詞の機能と意味について：文法化の観点から
Author(s)	橋本, 永貢子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58309
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【13】

氏名	橋本永貢子
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 24791 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	中国語量詞の機能と意味について－文法化の観点から
論文審査委員	(主査) 教授 杉村 博文 (副査) 世界言語研究センター教授 富田 健次 准教授 加藤 昌彦 教授 古川 裕 愛知大学国際コミュニケーション学部教授 荒川 清秀

論文内容の要旨

本研究は、中国語における量詞が文レベルで担う機能と意味について、文法化の観点から考察したものである。中国語の量詞は、日本語の助数詞と同様、事物や動作行為の数量に言及する際、それらの基本単位を表す。しかしながら、中国語の量詞は、単に数量を言う際に用いられるばかりではなく、数量を言わない場合にも、つまり数詞の付加が無い場合にも生起することがある。しかも場合によっては、文の成立にさえも関わり、量詞が無ければ文が言い切りにならないこともある。こうした機能は、どのようなメカニズムで獲得され、どのようなコンテキストで発揮されるのであろうか？これらを明らかにすることが本研究の目的である。

本研究が最も関心を寄せるのは、現代語における量詞の用法であるが、研究の方法としては共時的側面からのアプローチに加え、通時的側面からもアプローチしていく。両側面から見て行くのは、現代語の用法が「文法化(grammaticalization)」が進んだ結果ではないかという仮説に基づく。すなわち、本来名詞や動詞であったものが、事物や動作行為の数量をいう際の単位を表すようになり、中国語の場合はそれが更に機能的になったのではないかという仮説である。もしこの仮説が妥当であるならば、量詞の文法化を見ていくことで現代語の用法への理解を深められるだろうと考えたのである。

第 1 章では、こうした本研究の目的とその背景、現代語における量詞の分類について述べる。量詞の分類については、名量詞と動量詞に大別し、表わす量のあり方を基準にそれぞれについて新たな分類を試みた。その分類の根拠は、第 8 章で詳しく述べるが、名量詞と動量詞がおおよそ平行的に分類

類を試みた。その分類の根拠は、第8章で詳しく述べるが、名量詞と動量詞がおおよそ平行的に分類できたことは、本研究での一つの成果といえる。

第2章では、“V₁個O”構造における“個”の諸相を明らかにし、計数機能が無いといわれる用法があくまでも量詞から拡張したものであり、文レベルで“個体化”の機能を担っていることを示す。現代中国語において“個”は最も使用頻度の高い量詞である。専ら“個”で数えられる名詞の専用量詞として用いられるほか、“个”以外の専用量詞を持つ名詞とも結び付き、その場合、名詞が表す事物の内在的属性に着目する。また、“個”は動作行為の量を表す場合もあり、それは時間軸を捨象した要約的スキヤニングを言語化したものだと考えられる。したがって“次”や“回”などの専用の動量詞とは異なる動作量を表すことを指摘する。また“個”の用法の中には計数機能が無く、動作行為に“轻巧随便【気軽さ】”というニュアンスを付加するものがある。本稿ではそのニュアンスというのが、例示や要約的スキヤニングという表現の副産物であると解釈する。そして“个”は、あくまでも量詞であり、動作行為を“活动(event)”ではなく“事件(activity)”に変える働きがあると主張する。

第3章では、現代中国語のコピュラ文について、数量詞を伴う“是(一)个NP”と数量詞を伴わない“是NP”とを比較し、その意味と機能の相違についてコンテキストのレベルから考察する。“是(一)个NP”と“是NP”は、相互に交替可能な場面が少なくないが、数量詞の有無という相違がある以上、本質的な機能・意味には違いがあると考えられる。すなわち、本来、“是NP”は主語の属性を表す「措定文」であり、それと交替可能な“是(一)个NP”は「(倒置)同定文」に分類されるものだと解釈する。そして“是(一)个NP”が属性を表すとされるのは、語用論の意味に基づくものとの見方を提示する。両形式のこうした相違は、条件節と原因・理由節に現れる際、主節との意味関係のあり方によって選択される形式が異なることに反映している。また、日本語の条件節と原因・理由節で用いられる接続表現の選択が文の概念レベルと関わっていることを取り上げ、“是(一)个NP”と“是NP”がそれぞれ「個別的現象のレベル」と「事態命名のレベル」にあることを明らかにする。

第4章から第7章までは、量詞の通時的変化を見ていく。まず、第4章では、本来名詞や動詞であった語が、対象物とのどのような意味関係に基づいて事物の数量をいう際に用いられるようになったのか、そして名量詞として認識されるようになったかについて考察する。まず対象物の量については、物理的量と非物理的量とに分け、物理的量についてはさらに連続的量と離散的量とに分けて考えた。連続的量には、対象物の【相応量】を表すものと【組み】や【様態】【作用】を表すものがある。離散的量には【属性】を表すものと【部分】や【代替物】を表すものがある。これらの萌芽的用法では、本来の意味を保ったまま用いられているが、魏晋南北朝期には、その意味が希薄化、一般化したとみられる用法が現れた。このことは、名詞や動詞がもはや一時的に転用されるのではなく、すでに一つの新たな文法カテゴリーとして認識されていたことを示している。すなわち、魏晋南北朝期を境に単位を表す語は名量詞として認識されるようになったとの解釈を提示する。

第5章では、本来名詞や動詞であった語が、動作行為とどのような意味関係に基づいてその数量をいう際に用いられるようになり、そして動量詞として認識されるようになったかについて考察する。名量詞の場合と同様、動量詞という文法カテゴリー成立以前は、動詞や名詞が転用されて、動作行為の量を表していた。具体的には、時間的継続を表す、動詞を繰り返す、原因または結果の事態を表わす、動作行為の参与者を示すという方法が用いられた。そしてこれらの方法によって、動作行為を時間と関連付け、数量がプロセスの量、すなわち動作行為の量であることを語用論的に示していた。動作行為の量を表していた語は、唐代に入って、結びつく動作行為が広がり、量を表す語本来の意味が希薄化、一般化した用法が現れた。このことは、語用論的にプロセスを表わしていた形式が、既に【動作の回数】を表わす機能語、つまり動量詞として認識されていたからだとの解釈を示す。

第6章では、名量詞、動量詞が一つの文法カテゴリーとして成立して以降、さらに用法上の変化があったことについて、『大唐三藏取経詩話』と『老乞大』『朴通事』の用例から見ていく。第4章、第5章で述べたように、名量詞は魏晋南北朝期に、動量詞は唐代に成立したが、その機能は現代の用法とはなお大きな隔たりがあった。それはつまり、量詞成立以降、現代の用法に至るまでに更なる用法の変化があったということであるが、その変化として次の三点が指摘できる。

- ① 旧形式と新形式の併用から、旧形式の衰退へ
- ② 量詞の内包する意味目当ての使用から、事物あるいは動作行為を個体化するという機能目当ての使用
- ③ “个”のみが個体化機能を担う段階から、“个”以外の専用量詞も個体化機能を担う段階へ

こうした用法上の変化は、量詞の文法化を論じる上で、極めて重要な変化であり、特に「個体化機能」は、文法化の程度を測る際のパラメーターとして採用されるべきことを主張する。

第7章では、第4章から第6章まで見てきた量詞の通時的変遷について、文法化理論と照らし合わせながら、メカニズムと動因に対する理解を深め、またその普遍性と個別性を考察する。名量詞と動量詞は、本来名詞や動詞であったものが、幾つかの段階を経て今日の機能を持つに至っている。両者ともに文法化が進んだ基本的なメカニズムとして、文法化一般に見られる再分析と類推が挙げられる。一方で、文法化を促す要因は、形式の統一、意味の明確化、主観化など多様である。また、量詞の文法化においては当該カテゴリー以外の言語現象の影響を受けたと見られる変化があるが、それは言語一般に起こりうるものであるという考えを示す。中国語の量詞に個別的かと見られるのは、名量詞、動量詞という文法カテゴリー成立の後に、汎用的に用いられる語が交代したり、“遍”が機能性を低下させたりという現象である。これらが、方向性仮説に対する反例といえるか否かはなお十分な検討が必要であるが、中国語という言語の特性に関係があるだろうことを指摘する。

第8章では、第4章から第7章で見た量詞の文法化の流れを踏まえて、現代語の量詞の用法について考察を深める。まず、名量詞と動量詞について、事象の二大構成要素であるモノとプロセスを数量的に限定するという共通点によって、量詞という一つのカテゴリーを形成したことを指摘する。名量詞は空間領域における限定に関わり、動量詞は時間領域における限定に関わると考える。次に“V₁個O”構造における“个”について、その動量詞用法というのが、名量詞と動量詞の上位カテゴリーである【量詞】としての用法であるとの見方を示す。またコピュラ文である“是”字文に“(一)个”が現れる現象については、「個体化」という用法が動作行為を表わす文から状態を表す文へ拡張して用いられたと解釈する。「個体化」あるいは実在化という機能は、発話を話し手の「今・ここ」に結び付けるグラウンディング(grounding)に他ならない。中国語ではグラウンディングのための主要手段であるテンスが欠けているために——あるいはテンスという文法カテゴリーが欠けているため、それを補うべく、個体化機能を持った量詞が多用されると結論付ける。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国語の量詞(類別詞〔事物のみならず、動作行為の類別詞も含む〕)の歴史的変遷と現代中国語における機能的拡張を論じたもので、重点は後者に置かれている。歴史的変遷の記述に多くの字数が費やされているが、それは量詞の文法化の過程をたどり、現代中国語における機能拡張の状況をより明晰、より説得的に描き出すための作業として位置づけられる。

本稿の成果は以下の三点に集約される。

一、益岡隆司(1997)の提案する、日本語における文の二大別(「事態命名」と「現象記述」)と、中国語における量詞の有無が対応することを示した上で、その対立が「是」を述語とする判断文においても観察可能であることを指摘した。

二、量詞の使用が、文レベル=事件記述のレベルにおいて、Langacker(1990)で展開されたグラウンディング grounding と深く関わることを指摘し、それが中国語におけるテンスの欠如を補完するものである可能性を指摘した。この点は、上記一と相まって、中国語の量詞が日本語の類別詞には見られない多くの用法を獲得していることの理由とされる。

三、古代中国語における計数的用法から現代中国語における非計数的用法まで、その変遷をあとづけることにより文法化理論における方向性仮説の反例となるかもしれない現象を観察しえたことで、文法化理論に新たな視点を付け加えた。

審査の過程で、著者の結論がヴェトナム語やビルマ語では検証しがたく、中国語における個別的事情である可能性が指摘され、また、中国語の方言資料の検討が欠けているなど方法論的な欠点も指摘されたが、中国語量詞の歴史的変遷を記述するという膨大な作業をこなし、現代中国語における量詞の機能的拡張がたどった道と動機づけを提起しえたことは、言語類型論や対照研究

の基礎資料としても利用が可能で、その価値を高く評価することができる。

上記評価に基づき、本審査委員会は、本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。